佛立開導日扇聖人物語 第3回

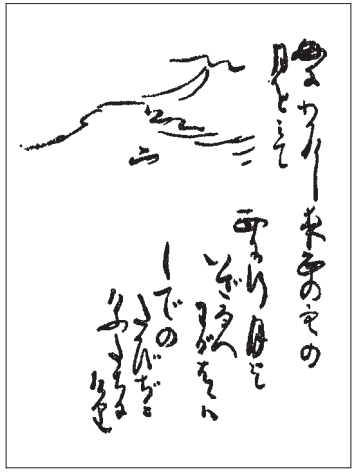
200th Anniversary
佛立開導日扇聖人ご生誕200年慶讃

開導聖人のご両親は、父親は聖人のまだ幼い時に家を出られ、聖人はお母様とお婆様の手によって育てられました。しかし、そのお母様は、開導聖人の二十五歳の時に、病気で亡くなってしまいます。今月は、その時の悲しい様子をお話します。

母との別れ

開導聖人は、子供の時からお母様とお婆様によって育てられたんだよ。だから、なによりもお母様のことが大切だったんだね。

ところが開導聖人二十五歳の時、これから京都の一流の学者として活躍が期待されていた時に、お母様はちょっとした病気がもとで亡くなってしまうんだ。天保十二年（一八四一）三月四日のことで、お母様のお名前は「国」、四十八歳だったんだよ。



母にわかれし夜　西の空の月をみて
西に行月よいざなへ　わがはゝハ
しでのたびぢニ　けふたちにけり
—扇全五巻一八四頁—

母「国」との別れを悲しむ

そのころを思い出されて開導聖人が詠まれた歌に、

おもひきや　散行花の　はかなさを
　ことしは親の　うへにみむとは

とあって、桜の花の散るころ、それまでは散る花びらを見て、世のはかなさ、さびしさを感じていた。

ところが、今はお母様が亡くなって、世の中の出来事、また、人の命は花が散るように本当にはかない、さびしいものだとわかってしまった、と言われているんだ。大変なショックだったんだね。

なお、このころは暦が今と違い、約一ケ月ずれていたから、お母様が亡くなられたのは、ちょうど桜の花が散る四月の初めだったんだ。

悲しみを超えて

開導聖人の実家は浄土宗で、南無阿弥陀仏と唱える信心だったんだ。お母様のお葬式もそこでされたんだよ。もちろんお墓も浄土宗のお寺にあるんだけれども、開導聖人は本当に南無阿弥陀仏の信心でお母様が仏様の所に行けるのかどうか疑問だったんだ。そこでご自身で仏様の教えを勉強して、本当の仏様の教えでお母様のご回向をしたいと思われるようになるんだ。

そして、浄土宗の偉いお坊さんにお話を聞きに行き、また、禅宗のお寺にも行って座禅をくみ修行もされるんだ。さらに大阪の能勢にある妙見という所で七日間も滝に打たれて修行されたんだ。しかし、お母様を亡くした悲しみも、この世のはかなさ、さびしさも忘れることはできなかったんだね。

そこで、当時の学問は江戸（東京）が中心だったから、お母様との別れを少しでも忘れるため、翌年に江戸に旅立たれるんだ。